

日本語 N ノ QC 型数量表現の意味機能

范 喜 春

1. はじめに

本研究で扱う日本語 N ノ QC 型は「彼らの一人が訪ねて来ました」の下線部のようなタイプの数量表現である。N は名詞、Q は数量詞、C は格助詞を表すとして、「彼らの一人が」の並列順序は N ノ QC である。

奥津（1983）では日本語数量表現 N ノ QC 型の数量詞 Q は部分数量を表すと述べている。

①あの鉛筆の（中の）3本を買いたい。（N ノ QC 型）

②チョムスキーの本の（中の）100ページを読んだ。（N ノ QC 型）

奥津（1983：22）

①の「あの鉛筆」の数量は3本以上であるし、②の「チョムスキーの本」は100ページ以上である。その中の3本や100ページで、どちらにせよ部分数量である。

Downing（1996）では以下の③、④のような N ノ QC 型を summative appositive と呼んでいる。本研究では summative appositive を総括的同格と呼ぶ。なお、分かりやすくするために、③、④の最後にそれぞれ通常の日本語表記を付した。

③ Kanojo-to, imooto-no Kawko-no futari-wa, sono toshi-o motode-ni tabete-iru no desu.

[彼女と妹のかえこの二人は、その土地を元手に食べているのです。]

④ Tada chigau no-wa sa, terebi-wa aka-to midori-no ni-shoku-no kawari-ni, aka-to midori-to ao-to san-shoku-no zoo-o “dooji-ni, tsune-ni” dashiteru wake na no yo.

[ただ違うのはさ、テレビは赤と緑の二色の代わりに、赤と緑と青と三色の像を「同時に常に」出しているわけなのよ。]

Downing（1996：232）

③、④の数量詞「二人」「二色」は前に置かれる「彼女と妹のかえこ」「赤と緑」を指している。また、岩田（2007）では N ノ QC 型についてもう一つの特徴を述べている。その特徴は N が Q の属性と解釈できるということである。

⑤五人の内、中年者の三人は大工、左官、足袋屋であった

⑥貴い血すじの姫に惹かれる男ごろの常として、誰もかれも、見ぬ恋に心

を焦がすのであった。その中の有力な求婚者の三人は、ことにも、自分こそはと躍起になっていた。 岩田（2007：100）

⑤、⑥では、「三人」という Q の属性を N である「中年者」「有力な求婚者」がそれぞれ表していると解釈できる。

先行研究によると、N ノ QC 型の意味は三つのタイプに分けられる。1 は部分数量で、2 は総括的同格（summative appositive）で、3 は N が Q の属性として解釈できるものである。

本研究では日本語数量表現 N ノ QC 型の意味機能を再検討し、N ノ QC 型の意味機能と各意味の使用頻度を記述することを主な目的とする。

2. N ノ QC 型の意味機能

本研究は北京日本学研究中心（2003）『中日対訳コーパス（第一版）』の日本文学作品 22 編と非文学作品 14 編から、数量表現 N ノ QC 型を含む文を手作業により採取した。収集した N ノ QC 型は 179 例ある。この 179 例の N ノ QC 型の意味機能は 9 種類に分けられる。具体的には、先行研究ですでに取り上げられている① Q が部分数量を表す場合、②総括的同格、③ N が Q の属性として解釈できる場合に加えて、④ N が主語として解釈できる場合、⑤ Q が N に所属する場合、⑥ N が Q の所在の位置を表す場合、⑦ N と Q が同格関係である場合、⑧ N が Q の所在の時間範囲を表す場合、⑨ Q が N の倍数を表す場合に分けられる。以下ではそれぞれの例を見ていく。

① Q が部分数量を表す場合

例文 1：「要するに、あの林まで行きゃ、いいわけさ」と斜面に伏せた兵の一人が教えてくれた。 （『野火』842 行）

例文 1 の数量詞「一人」は名詞「兵」の部分数量を表す。すなわち、数量詞「一人」は名詞「兵」の中の一人である。この数量詞「一人」は数量を表すだけではなく、代名詞の機能をもっている。すなわち、一人の不定の兵を指している。

②総括的同格

例文 2：それから五分ほどすると、こんどは三沢、律子、美代子の三人がいっしょに帰って来た。

（『あした来る人』3689 行）

例文2の数量詞「三人」は例文1と同じで数量を表すと同時に、代名詞の機能を持っている。しかし、例文1と異なるのは例文2の数量詞「三人」が定の人「三沢、律子、美代子」を指すことである。また、例文1と比べてみると、例文2では名詞Nの数と数量詞Qの数が一致しているが、例文1では名詞Nの数と数量詞Qの数が一致していない。すなわち、例文1の数量詞は部分数量を表すのに対して、例文2の数量詞は全体量を表す。

③ NがQの属性として解釈できる場合

例文3：四人の生徒のうち若い方の二人ははやく演奏の技術を覚えたが、年取った方の二人（その一人は七十歳だった）はなかなか覚えることができなかった。（『マッテオ・リッチ伝』1726行）

例文3の名詞「若い方」「年取った方」は数量詞「二人」の属性を表す。例文3の数量詞「二人」は例文1、例文2と同じで数量を表すだけではなく、代名詞の機能も表すことができる。すなわち、定の「若い方」「年取った方」を指している。しかし、例文3の数量詞は例文1、例文2と異なり、文全体から見ると、部分数量を表すが、N/QC型に限定して考えると、全体量を表す。つまり、例文の「二人」は文全体から見ると、「四人の生徒のうちの二人」という部分数量を表すが、N/QC型に限定すれば例文3の「二人」は名詞「若い方」「年取った方」の全体量を表す。本研究の調査の対象はN/QC型であるため、例文3の数量詞QはN/QC型では名詞Nの全体量を表すと見なす。

④ Nが主語として解釈できる場合

例文4：男児の五歳になるのを始めは頻りに可愛がって抱いたり撫でたり接吻したりしていたが、どうしたはずみでか泣出したのに腹を立てて、ピシャピシャとその尻を乱打したので、三人の子供は怖がって、遠巻にして、平生に似もやらぬ父親の赤く酔った顔を見思議そうに見ていた。（『布団』81行）

例文4の「男児の五歳になる」では格助詞「の」を格助詞「が」に変換することができるため、例文4のN「男児」は「五歳になる」の主語として解釈できると思われる。例文4の数量詞「五歳」は例文1～3と異なり、代名詞の機能を表すことができない。

⑤ QがNに所属する場合

例文5：私の二十歳はなんだかひどいものそのまま終わってしまいそうだけれど、あなたが私のぶんもあわせてくらい幸せになってくれると嬉しいです。
(『ノルウェイの森』2884行)

例文5では、名詞「私」と数量詞「二十歳」は、「私の人生の中の二十歳という時」と解釈できることから、所属関係にある。例文5は例文4と同じで代名詞の機能を表すことができない。

⑥ NがQの所在の位置を表す場合

例文6：彼女は二階の六畳から玄関わきの四畳半に移り、この家のなかで孤立の生活をしようと覚悟した。
(『青春の蹉跎』139行)



例文6は例文5と異なり、名詞「玄関わき」と数量詞「四畳半」は所属関係ではなく、例文3のような属性を表すともいい難く、N「玄関わき」は特定の部屋「四畳半」の所在の位置を表す。また、例文6の数量詞「四畳半」は代名詞の機能で特定の部屋を指している。

⑦ NとQが同格関係である場合

例文7：そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返して見た私は、はっと驚きました。
(『こころ』1546行)

例文7では「覚悟」は「二字」であり、「二字」は「覚悟」であるため、名詞「覚悟」と数量詞「二字」はともに定を表し、例文2と異なる総括的ではない同格関係である。

⑧ NがQの所在の時間範囲を指定する場合

例文8：「だってまさかあなた夜中の一時に私たちの寝室に入ってきてかわりばんこにレイブしたりするわけじゃないでしょ？」

(『ノルウェイの森』1122行)

例文9：午後三時のお茶のとき、重松が台所（茶の間）へ行くと、坂下の松林で春蟬が今年の第一声をあげだした。
(『黒い雨』176行)

例文8、例文9では名詞「夜中」「今年」はQ「一時」「第一声」の所在の基準

となる時間範囲を指定する。

⑨ Q が N の倍数を表す場合

例文 10：試算によると、六十年度の労働人口は現在の一.二倍にしかふえず、
営業用トラックの運転者は六十六万人にとどまり、自家用トラック
運転者の両方を合わせて百二十二万人を確保するのがせいっぱい
だという。 (『日本列島改造論』406 行)

例文 11：新幹線がこれまでに四億人以上、つまり、わが国総人口の四倍にあ
たる乗客を運んだ実績が、それを雄弁に物語っている。

(『日本列島改造論』414 行)

例文 10、例文 11 では、数量詞「一.二倍」「四倍」は名詞「現在」「わが国総人口」の倍数を表している。例文 10 の名詞「現在」は実際に「現在の労働人口」を指している。

以上④～⑨において、先行研究ではこれまで指摘されなかった N ノ QC 型の意味機能を述べてきたことに留意されたい。以上本節で取り上げた言語事実から、N ノ QC 型の意味機能は表 1 のようにまとめることができる。

表 1

日本語数量表現	意味機能
N ノ QC 型	① Q が部分数量を表す
	② 総括的同格
	③ N が Q の属性的に解釈できる
	④ N が Q の主語として解釈できる
	⑤ Q が N に所属する
	⑥ N が Q の所在の位置を表す
	⑦ N と Q は同格関係である
	⑧ N が Q の所在の時間範囲を表す
	⑨ Q が N の倍数を表す

N ノ QC 型は格助詞「ノ」から構成する連体修飾構造である。格助詞「ノ」の意味機能は多種多様であるため、N ノ QC 型は以上の表 1 のように 9 種の意味を持つことができると思われる。

例えば：

小兵衛、大四郎の二人 (小兵衛、大四郎という二人)

玄関わきの <u>四畳半</u>	(玄関わきにある <u>四畳半</u>)
私の <u>二十歳</u>	(私 [の人生] に属している <u>二十歳</u> [の時])
今年の <u>第一声</u>	(今年における <u>第一声</u>)
覚悟の <u>二字</u>	(覚悟という <u>二字</u>)

以上の考察を通して、NノQC型の意味機能が明らかになった。次の節では各意味の使用頻度とNノQC型の使用傾向を考察する。

3. 各意味の使用頻度と N / QC 型の使用傾向

この節ではコーパスから収集した日本語 N ノ QC 型数量表現を表 1 に従って整理し、同時に用例数を示す。そしてこうした作業を通し、日本語 N ノ QC 型のそれぞれの意味の使用頻度を考察する。日本語 N ノ QC 型の意味の用例数および百分率は、表 2 のようにまとめられる。

表 2

日本語数量表現	意味	用例数	百分率
NノQC型 179例	① Qが部分数量を表す	136例	76%
	② 総括的同格	17例	9.5%
	③ NがQの属性的に解釈できる	2例	1.1%
	④ NがQの主語として解釈できる	1例	0.6%
	⑤ QがNに所属する	2例	1.1%
	⑥ NがQの所在の位置を表す	7例	3.9%
	⑦ NとQは同格関係である	9例	5%
	⑧ NがQの所在の時間範囲を表す	2例	1.1%
	⑨ QがNの倍数を表す	3例	1.7%

以上の整理を通じて、日本語 N ノ QC 型のそれぞれの意味の使用頻度を明らかにした。Q が部分数量を表わす意味は N ノ QC 型の 76% を占めている。すなわち、ほかの意味より使用頻度が圧倒的に高いということがわかる。ここで注目すべきことは、集めた 136 例の部分数量を表す N ノ QC 型には以下のように、一つの共通点があるということである。

例文 14: 死者たちの一人がゆっくり躰を回転させ、肩から液の深みへ沈みこんで行く。(『死者の奢り』 9 行)

例文 15: 「とにかく、仕事を始めようじゃないですか」と雑役夫の一人が煙草

を靴で踏みにじりながらいった。 (『死者の奢り』 306 行)

例文 16: 玄関口には学友の一人が立っていて、起きてきた叔父叔母や私に、目を丸くして叫んだ。 (『金閣寺』 75 行)

例文 17: 孔から細く削った竹の一本を振り落した。 (『金閣寺』 1095 行)

収集した 136 例の部分数量を表す N ノ QC 型の数量詞 Q の数字はすべて 1 である。つまり、部分数量を表す時に、N ノ QC 型は N ノ一つという意味を表す傾向がある。そして、この N ノ一つの「一つ」は代名詞の機能で不定を表す。例えば、例文 14 の「一人」は代名詞の機能で一人の不定の死者を指している。一般に、例文 14 ~ 17 のように数字が「一」の時は不定マーカーとしての読みをもつため、N ノ QC 型が不定を表す時に、「N ノ一つ」という意味をとる傾向があると考ええる。

奥津 (1983) で取り上げた①、②のような部分数量 (数字が 1 ではない場合) を表す N ノ QC 型の例文はコーパスから集めた言語事実では見つからなかった。さらに、5 人の日本語母語話者に意見を聞いたところに、いずれも①、②が不自然であるという回答を得た。

①あの鉛筆の (中の) 3 本を買いたい。 (N ノ QC 型)

②チョムスキーの本の (中の) 100 ページを読んだ。 (N ノ QC 型)

奥津 (1983: 22)

奥津 (1983) で取り上げた①、②のような部分数量を表す場合、日常生活の中では次の⑦、⑧のように、数量表現 NCQ 型¹をとる傾向があると思われる。

⑦あの鉛筆を 3 本買いたい。 (NCQ 型)

⑧チョムスキーの本を 100 ページ読んだ。 (NCQ 型)

以上、本研究では部分数量を表す時に、N ノ QC 型は N ノ一つという意味を表す傾向があると主張し、この N ノ一つの「一つ」は代名詞の機能で一般に不定を表すことを指摘した。

1 「本を三冊」の並列順序は名詞・格助詞・数量詞であり、こうした「本を三冊」のような並列順序の場合を本研究では NCQ 型と呼ぶことにする。

4. おわりに

本研究は『日中対訳コーパス（第一版）』の日本文学作品 22 編と非文学作品 14 編から、数量表現 N ノ QC 型を含む文を取り上げ、日本語数量表現 N ノ QC 型の意味機能、各意味の使用頻度および N ノ QC 型の使用傾向を記述した。N ノ QC 型の格助詞「ノ」の意味機能は多種多様であるため、N ノ QC 型は 9 種の意味を持つことができると思われる。さらに、コーパスから集めた例文を N ノ QC 型のそれぞれの意味にしたがって分類・整理した。こうした作業を通し、N ノ QC 型のそれぞれの意味の使用頻度を明らかにした。部分数量を表す意味はほかの意味より使用頻度が圧倒的に高く、ほぼ 4 分の 3 を占めるということもわかった。そして、部分数量を表す時に、N ノ QC 型は N ノ一つという意味を表す傾向があることと、この N ノ一つの「一つ」が代名詞の機能で不定を表すことを説明した。しかし、N ノ QC 型では、なぜ部分数量を表わす意味はほかの意味より使用頻度が圧倒的に高いのかということを本稿では解答することができなかった。この問題は今後の課題としたい。

謝辞

本論文を書くにあたって、指導教員の佐々木一隆先生から多くの励ましとご指導をいただきました。この場を借りて、深く感謝の意を表します。また、いろいろと助言して下さった研究室の皆様にも感謝いたします。

参考文献

- 岩田一成 (2007) 「日本語数量詞諸相—数量詞の位置と意味の関係を中心に一」大阪大学博士論文。
- 奥津敬一郎 (1983) 「数量詞移動再論」『人文学報』160 号、1-23 頁。
- 奥津敬一郎 (1986) 「日中対照数量表現」『日本語学』8 月号、70-78 頁。
- 奥津敬一郎 (1996) 「連体即連用？第 3 回」『日本語学』15 巻 1 号、112-119 頁。
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタクス」『月刊言語』6 巻 8 号、83-91 頁。
- 小林昌博 (2004) 「数量詞の形式と量化の領域：日英語の対照の観点から」『対照言語学の新展開』ひつじ書房、125-135 頁。
- 小林泰秀 (1979) 「日英比較と数量詞、否定の問題」『広島女学院大学論集』通号

29、89-115 頁。

酒井弘・張超・吉村めぐみ（2009）「数量表現による事象限定と動詞連続構造」『語彙の意味と文法』くろしお出版、3-15 頁。

坂本智香（2001）「数と様態——日本語の数量表現をめぐって——」『国際文化学』神戸大学、121-131 頁。

柴谷方良（1978）『日本語の分析－生成文法の方法－』大修館書店。

中川正之・李俊哲（1995）「日本語と中国語における数量表現」『日本語と中国語の対照研究論文集』、95-116 頁。

范喜春（2012）「日本語の NCQ 型数量表現に対応する中国語の数量表現—形式と意味の観点から—」『比較文化研究』NO.102、159-173 頁。

Downing, P. (1996) *Numeral Classifier Systems : The Case of Japanese*. John Benjamins.

Matsumoto, Yo. (1993) “Japanese numeral classifiers : a study of semantic categories and lexical organization.” *Linguistics* 31, pp.667-713.